シンポジウム 「感性的コミュニケーションとしての舞踊」

講演

# 感性的コミュニケーションと身体

鯨岡　峻

## 1．はじめに

舞踊という領域の学会に私のような者を招いていただいて，たいへん光栄に思っている。私は発達心理学者として，ことばが登場してくる以前の初期の母子間のコミュニケーションを二者関係の問題としてこれまで研究してきた。そこでのコミュニケーションは基本的に感性的な性質のものであり，伝え合いというよりは通じ合い，分かち合いの様相が際立っていて，その通じ合うもの，分かち合うものの内容は，基本的には身体が感受し感応するものに基づいている。ここに，自己身体，他者身体，動き，身体の感応，通じ合い，分かち合い等々，皆さん方の研究テーマと共通する何かがあるように見える。

4年前，私は障碍のある子どもたちのコミュニケーションの問題を考える集まりに招かれ，そこで創作ダンスのワークショップを見学し，それにコメントするという機会を得た。その集まりはクリエイティブ・アートという団体が主催するもので，ウォルフガング・シュタンゲさんという英国のアーティストの指導するワークショップだった。このワークショップは音楽のもつ多様な vitality affect を活用しながら，それに身体が感応することに基づいているように見えた。世界各国の民俗音楽が次々に流れるなかで，参加者はそれに合わせて踊るのだが，決められた動きというものはなく，各自が自由に個性的に身体を動かしながら，しかしそこに通じ合うものがあるというところが素晴らしかった。そのなかでも，本日の話に直結するのは，次のようなシーンである。

一人のダウン症の女の子（C）が音楽に合わせて一人で踊り出す。そこにシュタンゲ（S）さんが踊りながら現れてCに接近し，デュエットの踊りのようになる。CにSが合わせてというより，CもSもそれぞれに主体として動いていながら，いつのまにかお互いが相手を誘い，相手に誘われて，自然にお互いの呼吸が合うようになり，文字通りのデュエットになっていく。そこには，ゆっくりした動きのなかで，相手の動きに引っ張られつつ，相手を引っ張るとでもいうような，非常に複雑な（しかし考えようによってはシンプルな）二者関係が見られ，それはまさに感性的コミュニケーションと呼べるものではないかと思われた。

## 2．感性的コミュニケーションと間身体性の問題

通常，コミュニケーションはＯＨＰに示すような伝え合いないしは情報交換として理解されがちである。しかし，身近な対人的場におけるコミュニケーションは，基本的には広い意味での情動の共有ないし分かち合いによる，通じ合いに収斂していくものである。

こうした広義の情動共有がコミュニケーションのベースだとすると，そもそもなぜ広義の情動は二者間を通底したり共有されたりするのかという問題が生じる。この問題を考えるとき，身体と身体がおのずから感応するという間身体性（intercorporalité）の問題を避けて通ることができない。この問題は，メルロ・ポンティ（1960／1970）が『シーニュ』所収の「哲学者とその影」の論文で詳しく取り上げている。そこでは「右手が左手を握る」という事態を手掛かりに，いずれ両手のどちらが能動でどちらが受動かを区別できない混交した事態となることに触れ，そうなるのは右手と左手が一つの身体の器官であるからだとした上で，この事態を二人で握手する場面に敷衍し，二者身体が触れ合うときにも同じように能動と受動が混交すること，自分と相手のあいだで一種のすり代わりがあることを指摘し，それはそれぞれの身体が，いわば二人で作り上げる一つの大文字の身体の器官だからだ，というような説明を与えている。ここに重要なヒントがある。

こうして二者身体が共鳴したり，同期したりする事実が，すべて間身体性という概念でくくり出されることになる。二人三脚，ダンスのパ・ドゥ・ドゥ，ギャロップする人と馬，あるいは，弦楽四重奏における出だしのアインザッツ等々。これらは傑出した例だが，この種の共鳴現象や共振現象を広くとれば，対面的なコミュニケーションなど通常の対人関係のほとんどは，この間身体的現象として理解できる。

間身体的現象が生まれるのは，われわれがある意味で，本源的に「他者に向かって開かれた存在」であり，「他者と共に在る存在」だからであるが，それはおそらく身体のさまざまな機能によっている。ここではそのような身体の機能を，一方での感受・感応する機能と，他方の表情する機能に分けて考えてみることにしたい。

### （1）感受し感応する機能

身体の感受する機能には，まず，手を握り合う，

体を抱き合う，体を手で触れる，のように，直接的に接触することによって，触覚や温度感覚や皮膚感覚などの内受容感覚が刺激されて某かが感受されるという，直接的・近接的な感受機能がある。他方では，他者のイライラした動きが私の身体に通底して，こちらも落ち着かずにイライラしてしまったり，相手の強い声に思わず身がすくんだりという例に見られるように，視覚や聴覚に基づくような遠隔的な感受機能がある。

二人三脚や，抱擁などは前者の直接的感受機能の例であり，この場合にはメルロ＝ポンティ言うところの「人文字の身体」という比楡がぴったり当てはまる。お互いの身体の直接的感受機能が交叉することによって同型的な感覚が二者身体に通底すると考えれば，この比喩は比較的よく理解できる。しかし，これからの話の文脈で重要になってくるのはむしろ遠隔的な感受機能である。なぜ人は，互いに身体を接触させてもいないのに，イライラのような他者の内受容感覚や，あるいは痛み，喜び，疲れ，といった広義の情動を把握できるのだろうか。なぜ，アイスダンスのような呼吸のぴったり合った動きがうまれるのだろうか。

この問題を理解する鍵となるのは，古典的には共感覚や力動的知覚の文脈で考えられ，最近ではD・スターン（1985）によって，vitality affectという概念によって考えられている，諸感覚の通様相性（cross-modality）だと思われる。vitalityaffectというのは，活性水準の高低，活動の輪郭，時間布置等の次元によって特徴づけられる広義の情動，っまり力動感のことである。例えば疲れた人を見て私たちがそれと分かるのは，その重い足取り，肩を落とし俯いた姿勢，さえない表情，暗い声などがもっている諸々のvitality affectがこちらへと通底し・その他者の「疲れた」状態がわが身に直接的に感じられることによってである。

要するに，メルロ＝ポンティの言葉を借りれば私たち人間は「同じ生地で仕立てられている」のだ。分かりやすい例を一つ上げておこう。これは6ヵ月になる乳児をその母親が這わせようとしたときのものである（鯨岡，1997）。

母親は，這うのを促すときに，「ウンショして，ほら，ウンショ，ウンショ」とかけ声をかけるが，この「ウンショ」というかけ声の冒頭に込められた力点は，乳児の腕に起こって欲しい瞬発的な筋肉運動と，チャンネルは違うものの，同じvitality affectをもっている。それゆえにこの音声的な刺激は乳児に浸透して，母親が願った筋肉運動（腕のっっぱり）が子どもに現れてくることになったのである。

このエピソードなどをみていると，相手の状態を変えるためにはまずこちらの身体の状態を変えようという，いわば一種の魔術的な試みがなされるかのようであり，しかもそれが結果的に功を奏することが分かる。従来の個体中心のパラダイムでは，母子を別個の自己完結した個体と捉え，その個と個の相互作用を考えることによって，そこでの同期性や呼応性が分析的に取り出されてきたが，実際には二者身体による間身体的現象がその相互作用を支えているのである。

（2）表情する機能

次に身体の表情機能について見ておく必要がある。表現機能と言わずに表情機能というのはカッシーラー風に聞こえるかも知れない。ここでは内的情動状態がおのずから外部に表れて表情を纏うという点を強調し，主体の意図的表現という意味を回避したいがためにこう言っている。私たちの身体は内部的，外部的に感受した広義の情動をおのずから表情，つまり顔の表情はもとより，姿勢，動きなどに表す機能を併せ持っているということである。幼児の顔の表情，身体や姿勢の表情は，まさに内面の情動の動きそのものであり，だからこそ，われわれはその表情を通して幼児の内面を直接的に把握することができる。その意味では，感受機能はそのまま表情機能に繋がっているといっても過言ではない。こうして，内部的情動状態は身体の表情となって現れ，その現れのもつvitality affectが他者身体の遠隔的感受機能によって把握されて，当の身体に同型的なvitality affectを喚起し，それがまた身体の表情となって現れる…この円環関係が結局は二者身体の共鳴・共振という間身体的現象をもたらす，と考えることができる。

（3）「成り込み」という現象

哲学者の廣松渉氏（1972）は，振動数の等しい音叉の比喩によって，空間的に離れた二者身体が共鳴し共振するというふうに間身体現象を説明している。拷問場面で我が子に焼きごてが当てられるのを見る母親が，その当てられる箇所において熱さを感じるという氏のあげている例は，ここでの文脈に近いものがある。廣松氏はそれを自我の膨縮という概念によって，つまり，自我が白己身体の境界内に閉じ込められておらずに，他者身体のところまで膨張しうるのだということによって理解しようとしているが，この点は間身体性の問題をより広く考えて行く上で，非常に重要な意味をもっているように思われる。

実際，初期の母子間に見られる感性的コミュニケーションにおいては，この種の自他関係，つまり，私の「ここ」と他者の「そこ」が混淆する事態が随所に見受けられる。私はこれを「成り込み」という概念で理解しようとしてきた（鯨岡，1997）。

私自身の経験でお恥ずかしいが，遠隔的感受機能と「成り込み」との関係を明らかにするために，次のような例を考えてみよう。娘がまだ幼かった

ときの，ピアノの発表会での出来事である。ステージに現れた娘が緊張した面持ちで椅子に座り，いすの高さを調節し，手の汗をハンカチでぬぐっていざピアノの鍵盤に触れようとする。会場の最後列でそれを見ている私は，いつのまにか娘に成り込み，娘の緊張を自らの緊張として文字通り固唾を飲む思いで，その様子に見入ってしまう。そして娘の指が鍵盤に触れるその瞬間に，まさに廣松氏が拷問の例で上げているのと同じように，娘の指のところで私の指が鍵盤に触れたかのような感じになった。数十メートルを隔てて，その瞬間に私は娘の位置にまで出かけ，娘と同じ気分になったと言える。

この例の基本にあるのは，二者身体が互いに遠隔的に感受可能だということだが，それを「私」や「あなた」に引き寄せて言えぱ，「私」の「ここ」が「あなた」の「そこ」になるという魔術的，脱自的事態がそこに成り立つということであり，これこそまさに文字通りの「志向の越境」であり「成り込み」に他ならない。

このような身体機能と「成り込み」という概念によって，少なくとも私たち発達研究者はこれまで顧みられなかった興味深い事実に定位し，その意味を考えることが可能になった。いろいろあるなかで，今日，ここで取りあげてみたいのは，次のような母親の表現である。

オムツを替えてもらって，機嫌のよい声を出している乳児に，母親が「ああ，いい気持ち」という例。あるいは，母親があやしかけ，それに微笑む乳児に対して，母親が「嬉しい，嬉しい，ね」とい言葉をかける例。あるいは，初めて戸外に靴を履いてでた乳児が，地面に座り込んでその靴を取ろうとして，なかなか取れないでいるときに，母親が「取れない，取れない，取れなくて一」と言葉をかける例（鯨岡，1997．1999）。

いうまでもなく，これらは母親が子どものある状態を描写的に表現したものとも読めるし，あるいは本来子どもが発話すべき内容を母親が代弁した形ともとれる。しかし，先程までの議論からすれば，描写はいうにおよばず，はたしてこれを代弁と呼ぶことが正しいのかどうかが問題になってくる。確かにこの種の発話のなかには，描写や代弁に他ならない場合もあるだろう。母親が子どもの外側に位置して，母親の「ここ」から子どもの「そこ」を見て発話している場合がそれに当たる。しかし，先に示したいくつかの例は，そこに居合わせて観察していると，とても描写したとか代弁したとかいう雰囲気ではない。むしろ，母親は子どもの位置に成り込んで，そこでいわば子どもになって発話しているという方がぴったりくる。先の例で言えば，「嬉しい，嬉しい」というところは成り込んで言っている部分，そして次の「ね」で母親は再び自分の「ここ」に舞い戻っている感じである。つまり，母親は自分の「ここ」と子どもの「そこ」を比較的自由に行き来しているということになる。それを代弁と言ってしまうと，その往還運動が無視されて，母親の「ここ」と子どもの「そこ」が固定されてしまうのではないか。

（4）間身体的現象を成り立たせている条件

間身体的現象は，初期の母子間コミュニケーションや初期の言語活動において見られるばかりでなく，私たち大人同士の目常的コミュニケーションにさえ見られるものである。しかしながら，身体を携えた二者がそこに居合わせたり対面したりすれば，おのずから，つまり半ば自動的にそれが起こるのかと言われると，そうではない。そのことは，これまで引いてきた例において，親ならば必ずそのように振る舞うかといわれればそうではないということに対応している。身体の感受機能や表情機能などというと，私たちの身体のそうした機能がおのずから働いて，間身体的現象をもたらすかのように響くが，それは決して自動作用などではないのである。

二者関係は間身体性を基盤にしているというのはその通りだが，間身体的現象を成立させるためには少なくとも何らかの条件が必要だと思われる。言い換えれば，間身体性というのはわれわれに与えられた可能性にすぎない。その可能性があるからこそ，私たちは親密な対人関係を取り結ぶことができるのだが，しかしそれはあくまでも可能性であって，それを現実のものとして遂行できるかどうかは，人によって，あるいは条件によって違ってくる。可能性として開かれているということと，いつもおのずから可能になることとは違うのだ。

先の例に戻って考えてみよう。「ああ，いい気持ち」や「嬉しい，嬉しい」と母親が言葉をかけた例において，フィールドに出かけ初めの頃の私なら，その場面で「気持ちいいね」とか「嬉しいね」と言っていたに違いない。言葉かけとしてはほんの僅かの違いに過ぎないように思われるかもしれないが，その僅かな違い，あるいはその落差は，成り込んでいるかいないかの，つまり子どもに気持ちを寄せて，子どもの「そこ」で事態を捉えているか，それともあいかわらず自らの「ここ」にとどまったまま，子どもの「そこ」をただ外側から見ているだけかの違いによってもたらされている。

そのことを考えると，当の母親にとって何事でもないかのように運ばれている間身体的関係の遂行が，それを可能にする暗黙の条件に支えられていると考えざるを得なくなってくる。いつもすでに可能性として与えられていることを，そのつど現実のものに転化させていくもの，それが問題である。可能性の基底にあるのは，身体機能なのだ

ろうが，それをそのつど機能させていくのに必要な条件，おそらく個人差に対応しているその条件が問題である。

アイスダンスの金メダリストたちの華麗な動きを間身体性という概念で説明することはできても，それが他のペアとは違ってかくも素晴らしい動きになるのはなぜかと問えば，そこには「である」と「する」との大きな乖離が見えてくる。そこに，実践学固有の問題があるのだと思う。

### 3．能動一受動の交叉

シュタンゲさんのワークショップを紹介したときに触れたように，二者の間身体的関係を考えるときに見過ごせないのは，一方を能動，他方を受動と切り分けられない点である。握手の例に見られるように，能動と受動が混交するというだけでは十分でない。むしろ能動でありつつ受動であり，受動でありつつ能動であるというような，まさに能動と受動が交叉する事態を考えて見る必要がある（鯨岡，1998．1999）。

例えば，乳児が母親にしっくり抱っこされているという事態を考えて見よう。ここで母親はもっぱら抱っこする能動，乳児はもっぱら抱っこされる受動と二者を切り分けたのでは，その「しっくり」という現象が説明できない。母親は抱っこする能動の側でありながら，乳児の抱かれ方にその抱っこの仕方を合わせるという受動性を秘め，他方の乳児も抱っこされる受動の側でありながら，母親の抱っこに乗っていくという能動性を秘めている。これがうまく絡み合うことによって,「しっくり」した抱っこが成り立っている。

このような能動・受動の交叉という考えを踏まえると，シュタンゲさんのワークショップの意義がよりよく見えてくる。実際，同じ子どもに学校の教師が同じように関わったとき，そこにはシュタンゲさんとのあいだのような「息の合った」デュエットのような関係は生まれなかった。シュタンゲさんは「先生が子どもに合わせようとしすぎて，先生が一個の表現する主体として生きていないからです」と見事にその本質を指摘した。教師の子どもに合わせようという気持ちが勝ちすぎると，教師自身が自由な表現主体ではおれなくなり，それによって子どもも自由に動けなくなるのである。

単に相手に巻き込まれるのでも，単に相手を引っ張るのでもなく，そこに微妙な相互性が生まれたときに，「しっくりくる」という現象が生まれる。

ここに，間身体的現象にどのように接近するかの難しい問題が横たわる。二者の関係を外側からみて相互作用として分析し始めると，間身体的現象そのものが霧散してしまう。だが，学問の立場でこの現象をどのように記述すればよいだろうか。研究主体であり記述主体である者が，間身体的現象を生きつつそれを記述するというとき，そこではその現象を生きる自分とその現象を外側から眺めて記述する自分とを同時に確保しなければならない。それと同時に，自分自身の身体を生き生きした身体として取り戻すことも必要になってくる。これは間身体一性の問題や感性的コミュニケーションの問題を議論するときに避けて通ることのできない問題である（鯨岡，1999）。

それはともあれ，身体が動けば内部で情動が動き，それによって感性的コミュニケーションの端緒が開かれる。ここに，私の研究対象である初期のコミュニケーションの問題，皆さん方の舞踊の問題，さらには格闘技などのスポーツをする人たちの問題が交叉する結節点があるように思われる。

参考文献

鯨岡峻（1997）原初的コミュニケーションの諸相　ミネルヴァ書房
鯨岡峻（1998）両義性の発達心理学　ミネルヴァ書房
鯨岡峻（1999）関係発達論の構築　ミネルヴァ書房
スターン（1985／1989）乳児の対人世界　小此木他訳　岩崎学術出版社
広松渉（1972）世界の共同主観的存在構造　勁草書房
メルロ＝ポンティ（1960／1970）シーニュ２　竹内芳郎監訳　みすず書房